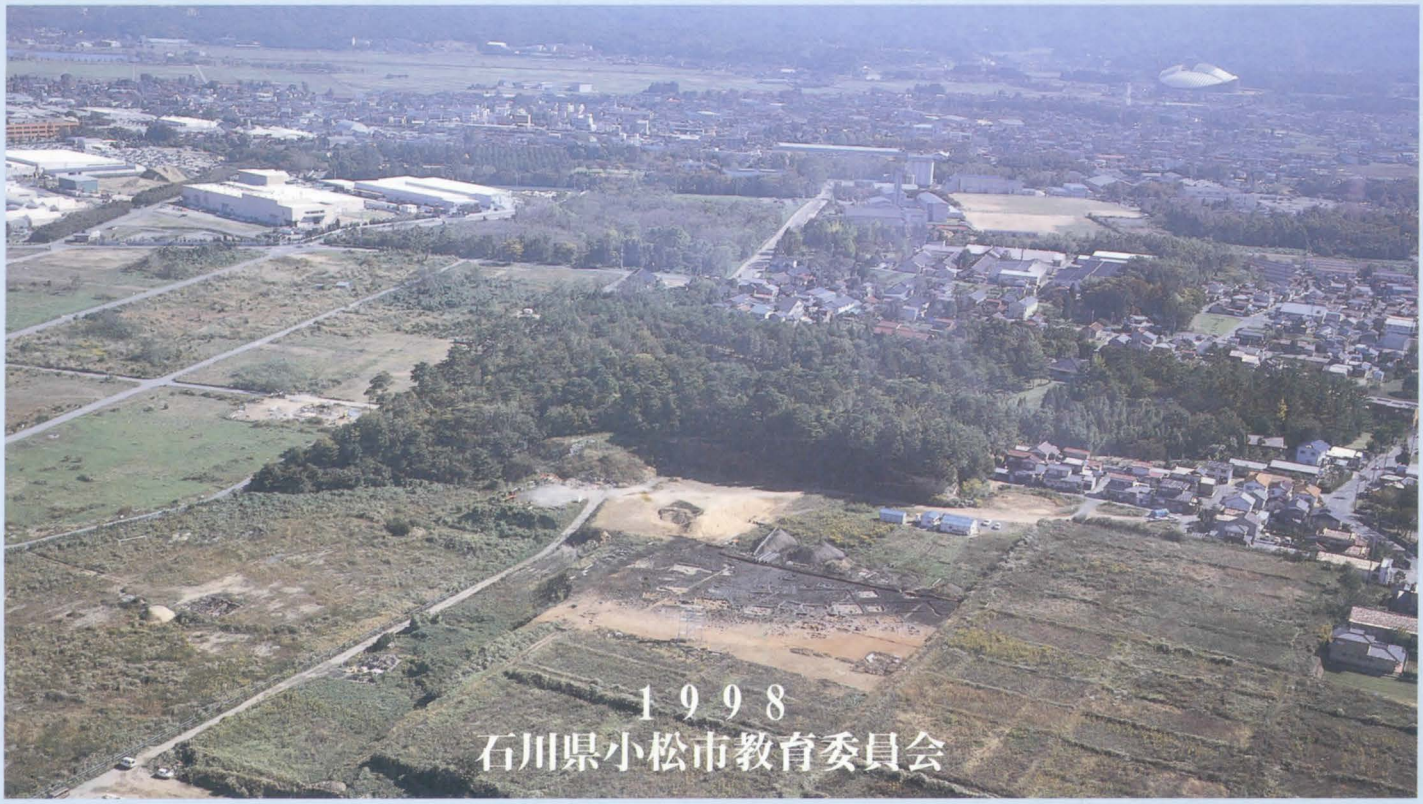
額見町遺跡

（額見町遺跡Ａ地区）

串・額見地区土地区画整理事業関連
埋蔵文化財発掘調査概要報告書－1－



1998
石川県小松市教育委員会

はじめに

遺跡や土器・石器などの言葉は、一般の方々に浸透している言葉ですが、行政的用語としては、地中に埋蔵されている文化財という意味で、埋蔵文化財と呼ばれています。埋蔵文化財は、遺跡全体を示す時に使われたり、土器や石器などの遺物単体を示すのに使われたりする総称的な言葉で、遺跡そのものや遺跡からの出土品は全て国民共有の財産である文化財に該当するという趣旨から付けられています。埋蔵文化財が所在する土地のことを埋蔵文化財包蔵地と呼びますが、全国津々浦々に広く分布し、小松市でも、これまでの調査で300箇所近くが確認されています。埋蔵文化財は、地中深く存在するものもありますが、多くは地表面から数十㎝程度から十数㎝程度、遺跡の種類によっては地表面に露出しているものもあります。埋蔵文化財はこのような極浅い所に存在するものであるため、通常行われるような開発工事で十分に破壊されてしまうものであります。開発工事から埋蔵文化財を保護し、調査することは、「文化財保護法」と言う国の法律によって定められており、小松市では教育委員会文化課埋蔵文化財調査室で、埋蔵文化財の調査や保護、開発工事との交渉を行っています。

発掘調査が行われる遺跡は、調査後に史跡として整備・保存される場合もありますが、多くの遺跡は、計画された開発工事によって破壊される運命にあるもので、ほとんどの場合、発掘調査の終了は遺跡の破壊を意味します。そのため、破壊された後でも、遺跡の内容が復元できるように、細かな調査が必要とされており、その成果をまとめた埋蔵文化財発掘調査報告書も、歴史の１ページとして後世へ残す責務があります。つまり、埋蔵文化財発掘調査報告書は、詳細な内容かつ正確な資料としての価値が要求される専門書である訳です。よって、どうしても、一般の方々にはわかりにくい内容となっており、これまで市民への活用の対象とはなっておりませんでした。

しかし、最近、埋蔵文化財関連の記事が積極的にマスコミへ取り上げられるようになり、小松市でも新聞やテレビで遺跡を紹介されることが多くなってきていることや、遺跡への見学希望者の年々の増加傾向など、埋蔵文化財への関心度は徐々に高まっています。そこで、今回は、それにお応えする形で、専門の発掘調査報告書とは別に、一般向けの遺跡の調査成果をまとめた報告書を作ることとなりました。できるだけ、内容は簡単にしてありますが、発掘調査で得られた成果のエッセンスはふんだんに盛り込んであります。この報告書が少しでも多くの方々に活用いただき、額見町遺跡の発掘調査が少しでも地域社会にお役立てできればと考えています。そしてまた、先人たちの残した貴重な文化遺産である埋蔵文化財の保護について、ご理解をいただければ幸いに存じます。

平成10年２月14日

小松市教育委員会
教育長　矢原珠美子

目　次

Ⅰ．額見町遺跡ってどんな遺跡？ …… 1
Ⅱ．何故、発掘調査をしているの？ …… 4
Ⅲ．発掘調査の始まりから終わりまで …… 5
Ⅳ．どんなものが出てきたの？そして何がわかったの？ …… 6
　１．額見町遺跡Ａ地区の全体像と古代村の景観 …… 6
　２．縄文時代から続く古来の住居様式 ……10
　３．古代のプレハブ住居 ……15
　４．ゴミ穴は語る ……16
　５．鉄器作りと技術者 ……17
　６．古代食器の移り変わり ……18
　７．特殊な出土品とその背景 ……20
Ⅴ．今回の調査成果から予想される額見町遺跡の性格 ……21

額見町遺跡と柴山潟

Ⅰ．額見町遺跡ってどんな遺跡？

額見町遺跡の発見

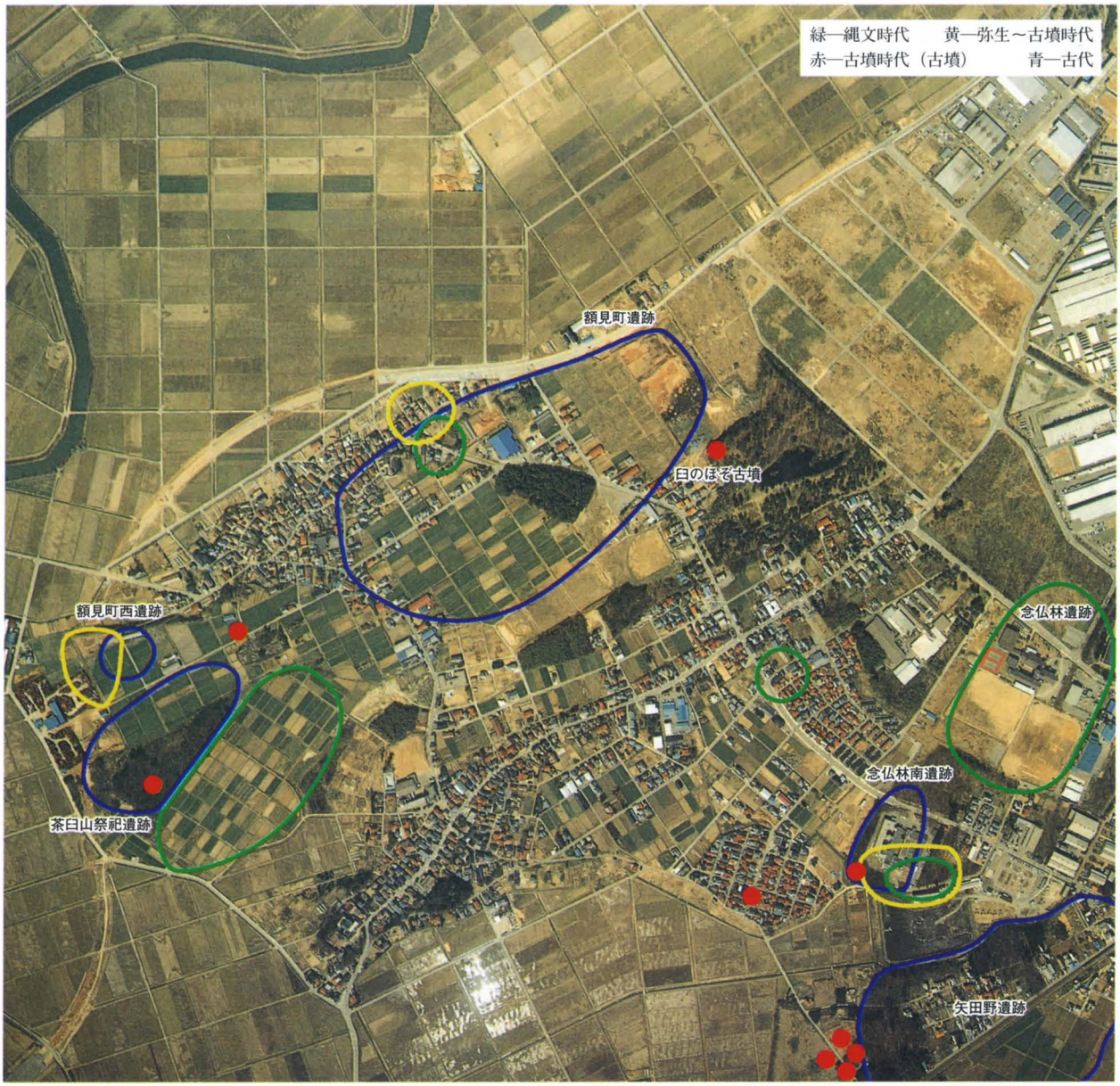
額見町遺跡は、昭和56年度の石川県教育委員会の分布調査（表面露出している土器採集による地点調査）によって初めて発見された遺跡です。が、額見町に住む方々の話を聞くと、昔から土器や石器が畑の中から多数出てきており、遺跡の存在は古くから予想されていたようです。

額見町周辺の遺跡

額見町、月津町、四丁町に広がる台地は、月津台地と呼ばれていますが、この台地には、たくさんのいろいろな時代の遺跡が点在しています。

この地に人が住むようになったのは、旧石器時代や縄文時代の始まり（約15,000年から10,000年前）ですが、住居をかまえ、集落が作られるようになったのは縄文時代の中期（約5,000年前）からです。額見町遺跡からもこの時代の土器や石斧が出土していますが、現在小松短期大学が建てられている場所には、この時期の大きな集落跡である念仏林遺跡が存在していました。

額見町遺跡の位置（縮尺1/150,000）



額見町遺跡周辺の地形と遺跡分布

遺跡は縄文時代後期以降、一度途絶えますが、弥生時代後期（約1,800年前）になると、再び集落が営まれるようになります。現在第２松寿園の建てられている台地周辺や額見町の台地縁辺には竪穴住居跡が確認されており、古墳時代中期（約1,450年前）頃まで同じような場所で村が営まれていたようです。また、同じ古墳時代中期から後期にかけて、この地域には多くの古墳が作られるようになります。有名なところでは、平成９年に国の重要文化財に指定された人物や馬の埴輪を多数出土した矢田野エジリ古墳や、市の指定史跡となっている御幸塚古墳、多くの古墳が群集する矢田借屋古墳群、そして額見町遺跡Ａ地区の東側に隣接する高台の頂上には、小松市最大規模の前方後円墳である臼のほぞ古墳があります。古墳は当時の権力者のお墓ですが、古墳が多く作られる古墳時代後期（約1,500年～1,600年前）には、この周辺の村は一度途絶え、別の地域に移住して行ったようです。その間、およそ100年、この地域には村の形成はなく、有力者の墓が競って作られる地域となっていました。

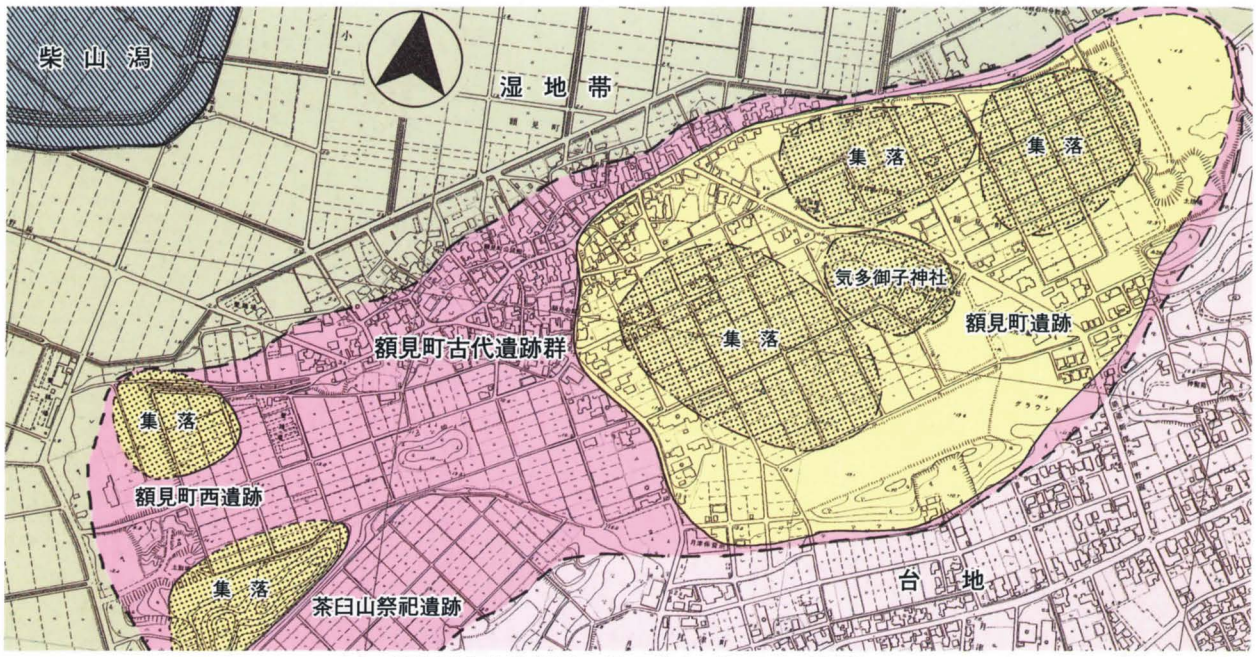
額見町周辺の台地には古くから村が作られていますが、大規模な村がこの地に営まれるようになったのは、飛鳥時代（1,400年前）になってからです。飛鳥時代から奈良時代、平安時代末期まで約500年の間、額見町周辺の台地にはほぼ継続して村が営まれており、いくつかの小さな村に別れながら、この一帯に大村落が作られていたようです。これらの古代の遺跡をまとめて額見町古代遺跡群と呼びたいと思います。

額見町古代遺跡群と律令政治

飛鳥時代になると、新しい政治の仕組みが整い、奈良に都が作られ、律令政治が始まります。

この時期、加賀国はまだできておらず、この地域は越前国の江沼郡に属していました。江沼郡には古代、九つの郷（古代の末端行政区画）の名が見られますが、額見町周辺はそのうちの「額田郷」に属していたと予想され、額見町の地名由来もここから来ていると予想されています。郷域は加賀市の動橋川流域付近から、分校、そして北の端は額見町付近まででであったようです。この地域の西側には柴山潟が大きく場所を占めており、村が営まれる地域は限られていたようで、遺跡の分布を見ても、額見町古代遺跡群以外では、大きな集落遺跡は確認されていません。たぶん、額見町古代遺跡群が、額田郷の中核となる村であったと予想され、古代の地方役人の務める役所施設もこの遺跡群の中に存在していたものと予想されます。ただし、そのような建物跡はこれまでの調査では確認されていないのが現状です。

額見町古代遺跡群はおおまかに見ると、４つから５つの小さな村の単位があったようで、役所的な施設もこれらの村の中にあり、村全体が行政的機構の中に属していたものと考えられます。これらの村は飛鳥時代の始まりに、突如として現れますが、村に住む人達は、もともとここに住んでいたのではなく、行政的な強制力をもって、移り住んだ人達が大半であったようです。その中には、技術者として優遇されていた朝鮮半島や中国大陸からの渡来人が多数含まれていたと思われ、先進的な技術をもって、当地域の産業振興に大いに活躍していたようです。古代遺跡群の村々は、国や郡、そして郷の行政的支配のもと、土地や人民が管理・支配され、計画的に配置されていたようです。



額見町古代遺跡群の村の分布（1/10,000縮尺）

律令政治の衰退と古代末期の荘園経営

律令政治が土地や人民を強く支配管理していたのは、奈良時代までで、平安時代に入ると、地方役人が私腹を肥やしたり、寺院や貴族達の新たな個人の土地開発によって、支配管理が緩むようになってきます。この時期に、加賀国は越前国から分離して作られますが、このような律令政治の管理が緩むことに伴って、京の都からの支配がちゃんと及ぶように、都から役人が派遣され、新たに国が作られた訳です。このような時代の流れを反映するように、額見町古代遺跡群も、平安時代に入ると衰退し、建物が半減しているようで、役所としての施設も存続していたか疑わしい状況です。これはまさしく政治の変化を反映した遺跡の盛衰と言え、村々が行政の管理下のもとに形成され、営まれていたことを如実に物語っています。

このような遺跡の状況は平安時代終わりまで続きますが、11世紀頃から12世紀前半頃になると、再び多くの土器や建物が額見町周辺各地で確認できるようになります。これは古代にあった村が再興されたとも考えられますが、新しい経済基盤のもと、新たに村の形成が行われた可能性が高いようです。この時期は、律令時代から院政時代へ変わっており、地方の人民・土地の管理・支配も大きく変化します。寺院や貴族が新たに土地開発して領地を広げる荘園経営が盛んに行われる時代であり、新たな勢力として武士が台頭してきます。当地域でも12世紀前半頃、文献資料において「鳥羽院領額田荘」の名が見られ、荘園経営に伴って村落が活性化したものと理解されます。この時期は古代村落から中世村落へと移り変わる時期であり、当台地の村々も、12世紀前半をもって消滅するようです。中世になると水のない台地よりも水田経営がしやすい動橋川流域などの平野部へと移動して行ったものと予想されます。

額見町遺跡A地区の近代遺構の完掘全景

Ⅱ．何故、額見遺跡は発掘調査しているの？

発掘調査の原因

串・額見地区土地区画整理事業（工場団地造成工事）によって台地が削り取られてなくなるため、事前に遺跡の存在する部分の調査を行っています。遺跡が確認された区域は文化財保護法という国の法律によって、保護するように義務づけられており、やむなく工事によって破壊される場合には、工事前に発掘調査を実施することが定められています。

発掘調査は、遺跡の生活の跡や村の様子を詳細かつ正確に復元し、図面や写真で記録するもので、出土品は全て教育委員会に持ち帰り、保管します。遺跡は調査完了後、保存される場合もありますが、ほとんどは工事によって破壊される運命にあります。そのため、遺跡を正確に復元するため、細かな調査が必要とされており、多くの時間と資金を必要とします。

発掘調査区域と面積

串・額見地区土地区画整理事業計画区域内のうち、遺跡が存在する区域全てが発掘調査の対象となります。面積は全体で38,000㎡あり、この内、県道区域相当分の面積は施工主体である石川県が発掘調査を行います。

今回の発掘調査地区と今後の予定

今回調査を行った区域は遺跡の北東側にあたるＡ地区で、約5,500㎡の面積です。調査区の設定は、遺跡の内容や工事計画によるものではなく、調査年度で一名の調査員が完了できる面積によって便宜的に区割り設定したもので、北東隅を初年度にし、Ａ地区としました。平成９年度はＢ地区の7,700㎡、平成10年度以降は、Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｇ地区と調査して行く予定です。また、平成10年度以降は２地区併行で実施する予定で、平成12年度完了を考えています。

額見町遺跡の調査地区割図

Ⅲ．発掘調査の始まりから終わりまで

Ａ地区の発掘調査は、冬季の中断を４カ月挟みますが、平成７年９月20日から平成８年10月31日までの、２年度にわたる約１年１カ月をかけて行われました。

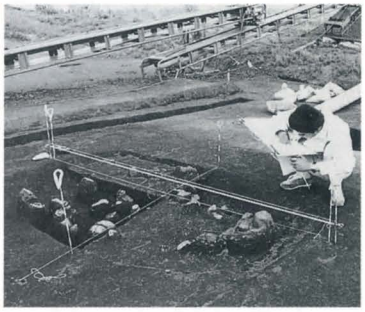
調査は、実際に現場での作業に着手する前に、国や県へ発掘調査を行うための届け出書類を提出し、それが受理されたことを確認して着手します。

現場での作業は、主に臨時作業員さんが手仕事で行いますが、その前に、パワーショベルを使って、現代の盛り土や表土の剥ぎ取りを行い、昔の人達が生活していた地面まで掘り下げます。

そして、いよいよ発掘調査に取り掛かる訳ですが、作業の手順は下の写真のようになります。

地面を掘り下げ遺構を探し、遺構の形・範囲を確認する。

遺構を土層記録のための畦を残し、土器を残しながら掘る。



遺構に埋められている土層の断面図を記録する。

竪穴住居跡の中をカマドや土器を残しながら掘り下げる。

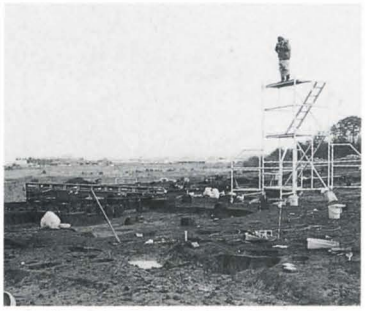
竪穴住居内のカマドを土層図を記録しながら、掘り下げる。

竪穴住居内に残された土器のまわりの土を取り除く。

土坑（ゴミ捨て穴）の中を土器を残して掘り下げる。

掘立柱建物跡の柱穴を土層記録しながら掘り下げる。

遺構の全景写真を撮影するため地面をきれいに清掃する。



遺構の全景写真をタワーを組んで高所から撮影する。

遺構の平面図を方眼の升目を組んで記録する。

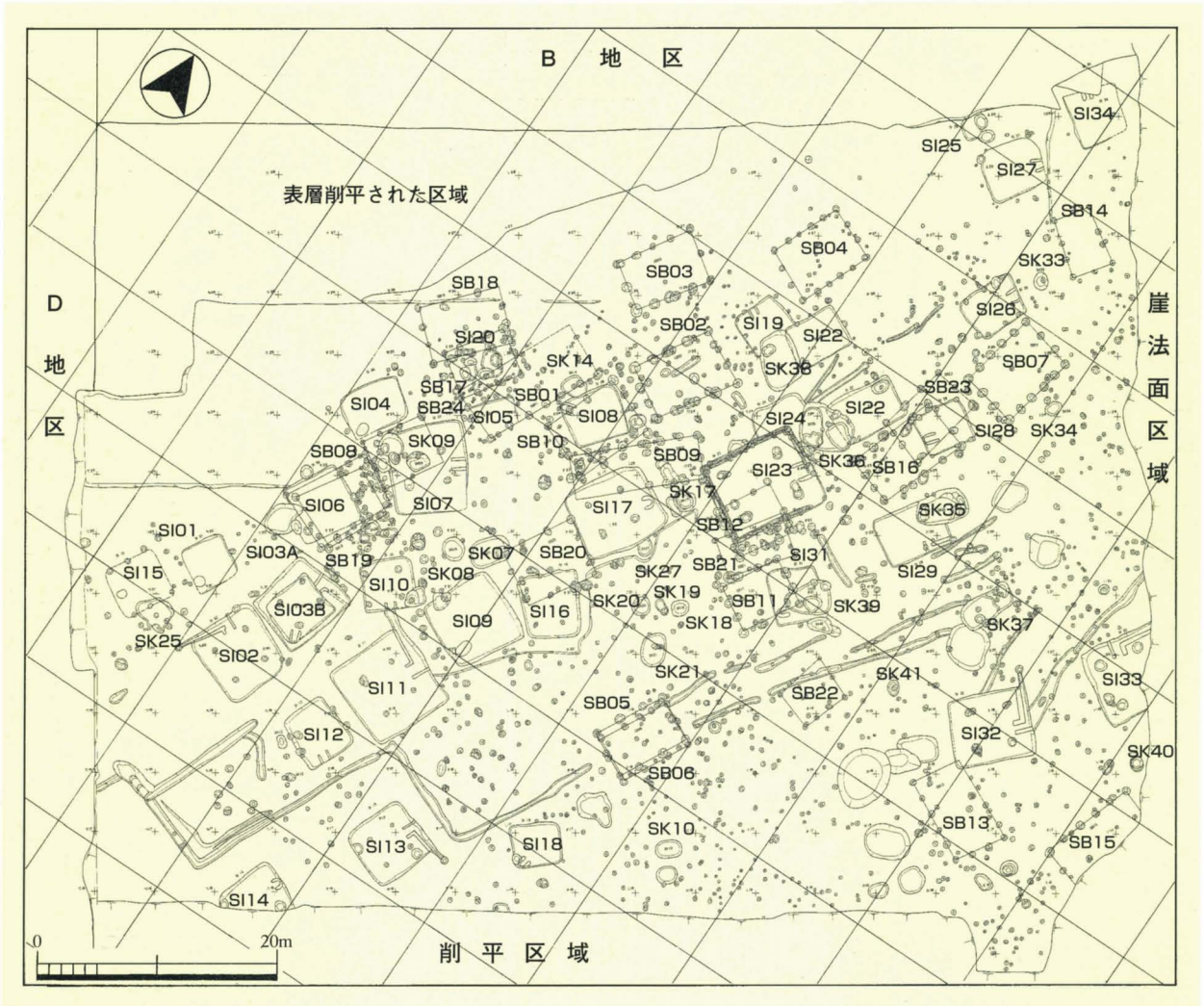
遺構の全体平面図を平板測量で記録する。

Ⅳ．どんなものが発見され、そして何がわかったの？

１．額見町遺跡A地区の全体像と古代村の景観

額見町遺跡は、飛鳥時代から平安時代にかけて営まれた古代の村の跡で、Ａ地区からは主に家の跡が発見されました。家の跡には竪穴住居跡と掘立柱建物跡の二つの異なる建物があり、竪穴住居跡は34軒、掘立柱建物跡は24棟発見されました。竪穴住居跡は主に飛鳥時代のもので、掘立柱建物跡は飛鳥時代から奈良時代にかけてのものが大半を占めます。また、建物・住居跡以外にも、壊れた土器などを捨てた穴が10箇所、屋外で煮炊きを行ったと思われる炉跡が17箇所発見されました。

これらの建物・住居跡等は、主に飛鳥時代から奈良時代までのおよそ200年の間で、建てられ、作られたもので、同時に全ての建物や住居が存在していた訳ではありません。長い年月にわたって生活した人々の痕跡であり、同時期に存在していた住居や建物は、それほど多くはなかったと考えられます。古代の村ではだいたい３軒から５軒が一つの単位としてまとまりをもつようで、その単位が幾つか集まって一つの集落グループを形成していたようです。古代の村は、主に北方向の同じような軸をもって家々が計画配置されて建てられることが多く、家並みや村の中を通る道も存在していたものと思われます。また、家々が建て替えられる時は、各家まとめて一斉に行われることが多く、家と建物の重なり具合から見て、飛鳥時代の中では、前半の終わりと後半の始まり頃、後半の終わり近く、奈良時代始まり頃に計３～４回行われていたものと予想します。この当時の木造建物の耐久年数は、だいたい10年



額見町遺跡A地区全体図

から15年と言われていますが、そのような建て替えは、そのままの場所で行われるケースが多く、その場合は柱穴の位置が変わったり、家の大きさが若干変わったりする程度で、別の場所に移動することは少なかったと予想しています。古代の村は、外部からの強い規制のもとで、村を計画的に形成して行かなければならず、人員の配置や農地なども強い規制が働いていたものと考えられています。このような村落を計画村落と呼ぶことが多く、古代の村の一つの典型的な形として提示されています。

竪穴住居が並んで発見されている様子（南東側区域の西から東への景観）

額見町遺跡A地区全景写真

2．縄文時代から続く古来の住居様式（竪穴住居）

竪穴住居の構造

竪穴住居とは地面よりも一段掘り下げた穴を使って建てる建物で、縄文時代から続く一般的な原始・古代の家の建築様式です。作り方は、まず地面を四角く竪穴を掘り、底を平らに整地します。額見町遺跡で発見された竪穴住居跡は正方形と長方形とがあり、正方形は大きいもので８ｍ、小さいもので４ｍを測ります。長方形は６×４ｍから４×3.5ｍ程度の一回り小さいものにまとまる傾向があります。

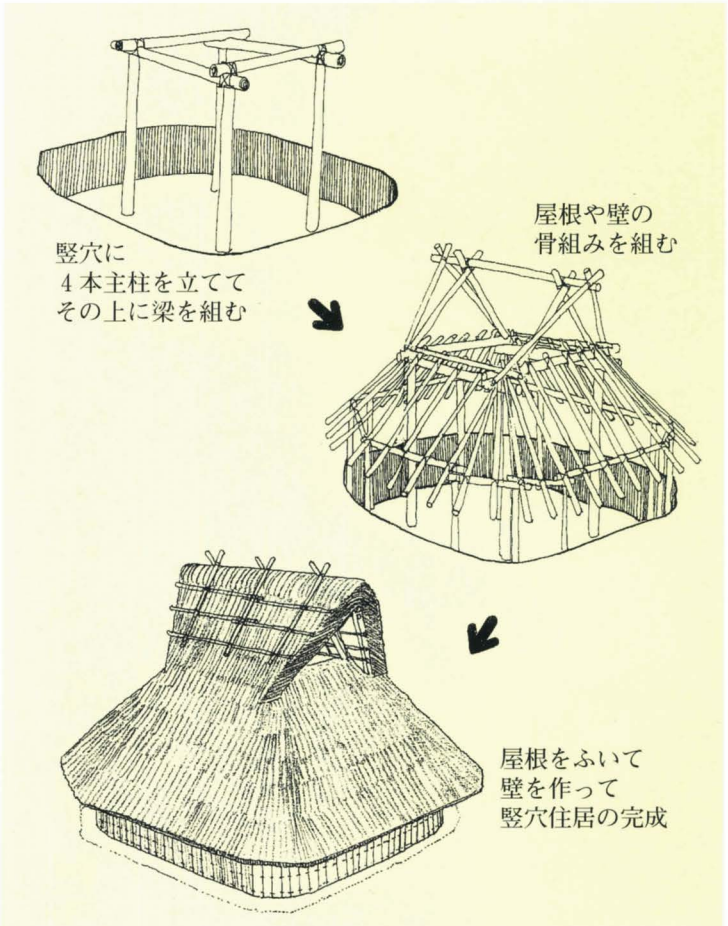
正方形の竪穴の場合、対角線上に主柱を４本。長方形の竪穴の場合、縦の壁際に主柱を６～８本建てます。主柱は４本でも６本でも、その上で桁が組まれ、棟を上げて屋根をかけます。壁は、多くの場合、板塀であったと予想されますが、４本柱の場合は、竪穴の壁に沿って家の壁が作られ、６本柱の場合は、柱の並ぶ竪穴の壁のみ１～２ｍほど竪穴の外側に壁が作られるようです。

古代の一般的な竪穴住居跡（念仏林南遺跡26号竪穴住居）

床は土のままの土間が多かったようです。住居の床として使った部分は硬く踏み固められており、特に柱に囲まれた部分が硬くなっています。柱に囲まれた部分が居間的機能、その周りの柱の外の空間が寝間や物置き場であったようで、長方形竪穴の場合は、竪穴の部分が居間的な空間、竪穴の外の一段高い部分が寝間や物置き場であったようです。また、この時代の竪穴住居には、必ずカマドが作られています。粘土と石を使って作られるもので、竪穴の壁際に作られます。カマドはご飯を炊いたり、ものを煮たりする、炊事場ですが、囲炉裏と同じように、明かりや暖をとる機能も合わせ持っていたようです。

竪穴住居の変遷

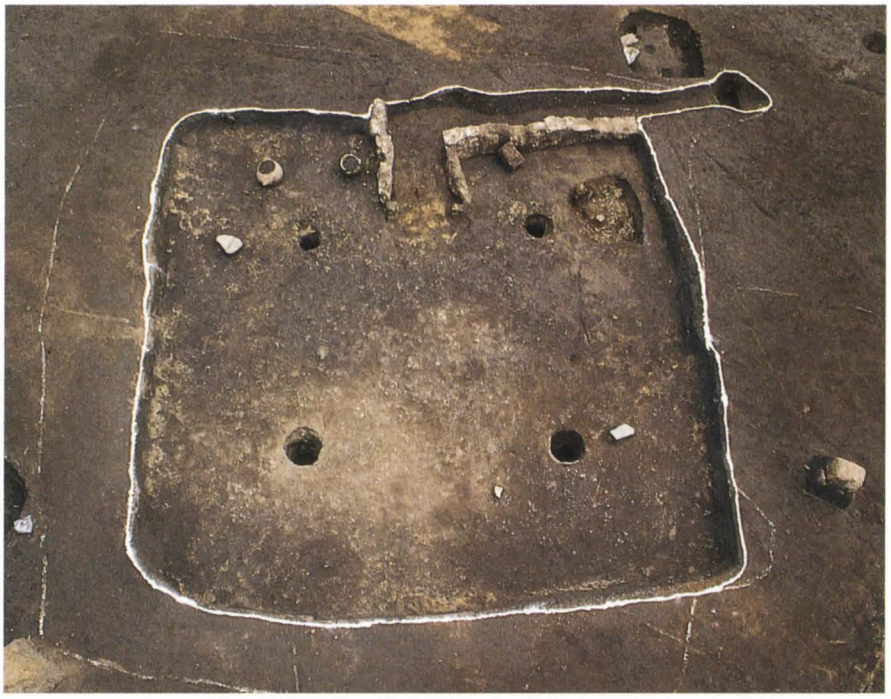
竪穴住居跡は、時代によって形が異なり、柱の本数や住居の形、カマドの形も異なります。額見町遺跡では飛鳥時代の始まりから奈良時代前半まで確認されますが、奈良時代前半頃以降は竪穴住居跡よりも掘立柱建物跡が多く発見されており、後半には竪穴住居跡はほとんど確認されなくなります。技術の進歩やその時代の流行などによって、建築様式が変わって行ったものと言えます。



竪穴住居の復元図（鬼頭1985より改変転載）

《飛鳥時代前半の竪穴住居》

A地区で発見されたこの時期の竪穴住居跡は6軒ありますが、いずれも竪穴や柱の配置、そしてカマド形態において、同一の特徴をもつもので、一つの竪穴住居構造にまとまる様相をもっています。竪穴の規模は一辺が5.5mのものから7.5mのものまで様々ですが、形は正方形で、4本の主柱が対角線上に正方形に配置されます。カマドは壁の中央付近に作られます。大型のもので、煙道が壁沿いにL字形に曲がる形状をもつ「オンドル状遺構」と呼ばれているものです。オンドル状遺構については、額見町遺跡最大の発見であるため、後で詳しく紹介します。



飛鳥時代前半の竪穴住居（13号竪穴住居跡）

（2号竪穴住居）

飛鳥時代前半のオンドル状遺構をもつ四本主柱の竪穴住居跡　（32号竪穴住居）

《飛鳥時代中頃の竪穴住居跡》

A地区で確認できた飛鳥時代中頃の竪穴住居跡は、僅かに2軒でありましたが、これは、この時期が村の中で住居の建て替え時期（世代交替時期）にちょうどあたっていたことに関連するものと予想しています。2軒の竪穴住居は、いずれも、長方形の小型竪穴で、壁際に主柱穴が並ぶ形態のものと予想されます。

カマドは、1軒は前半からの系譜を引くやや小型化したオンドル状遺構、もう1軒は飛鳥時代後半に一般化してくる主軸上に煙道が伸びる煙道戸外型カマド構造をもちます。小型長方形竪穴は飛鳥時代後半に主体的な竪穴住居形態ですが、1軒はカマドが前半の特徴とされるオンドル状遺構をもっており、前半と後半のちょうど過渡的様相をもつ竪穴住居形態と言えます。

飛鳥時代中頃のオンドル状遺構をもつ小型竪穴（29号竪穴）

《飛鳥時代後半の竪穴住居跡》

A地区で発見された竪穴住居跡の半数以上はこの時期に位置付けられるもので、確認できたもので18軒を数えます。竪穴住居の形態は、この時期、大型正方形竪穴と中小型正方形竪穴、中小型長方形竪穴の３種類に分かれ、柱の位置も異なります。大型正方形竪穴は、１辺が７～９ｍのもので、しっかりした大型の主柱穴を４本もち、大型のカマドが壁の中央に作られます。４本の主柱穴や大型のカマドは前半の住居構造の流れを汲むものと言えます。A地区では３軒ありますが、いずれも建物が建つ区域の中央付近に集中して存在しており、この時期はこの竪穴を中心として家々が配置されていたようです。

飛鳥時代後半の四本主柱をもつ大型正方形竪穴（17号竪穴住居跡）

次に、中小型正方形竪穴ですが、一辺が４～５ｍのもので、４本の主柱穴をもつ点では前半の竪穴と共通します。しかし､柱穴の位置が片側のみ竪穴の壁際に片寄ったり、４本とも竪穴壁際に立てられる変則的な柱配置をするもので、カマドの位置は壁中央かやや片側に寄る傾向をもちます。前半の住居構造の変形型として当期に出現してくるものと言えます。

最後に、中小型長方形竪穴ですが、４×５ｍ前後の規模をもつもので、縦の両壁際に３～４本の細い主柱が立ち並ぶ側主柱の住居構造です。柱穴の掘られる位置は竪穴壁の内側の場合と外側の場合がありますが、基本的には同一の構造のものであり、また、柱穴の確認されていないものもありますが、これは柱穴が確認できなかっただけのものです。側主柱のものと同様に、柱穴は竪穴壁の外側にあったものと思われますが、穴のある部分の地面が盛り土であったり、削られてなくなっている可能性が高いものと考えられます。カマドは小型で、横の壁中央付近に作

（10号竪穴住居跡）

飛鳥時代後半の変則四本主柱をもつ中小型竪穴　（12号竪穴住居跡）

（26号竪穴住居跡）

飛鳥時代後半の側主柱をもつ小型竪穴　（18号竪穴住居跡）

られる場合と、コーナーに斜めに作られる場合とがあり、後者が新しいタイプのものと言えます。この住居構造は、飛鳥時代中頃より出現しますが、普及するのは飛鳥時代後半になってからであり、この時期の竪穴住居の７割を占める一般的な住居構造です。奈良時代以降確認される竪穴住居もほとんどがこの構造のものであり、大型の竪穴住居は飛鳥時代後半をもってなくなるものと予想されます。また、遺跡を調査していると、右の写真のような焼けた木材や焼け土が大量に竪穴住居内に残っている場合があります。額見町遺跡Ａ地区でも27号竪穴住居跡で確認されましたが、これは火災によって焼けた竪穴住居跡で、火災住居と呼んでいます。燃え残り木材や焼け土を細かく調査することは、住居建築の方法を復元するための貴重な資料となります。

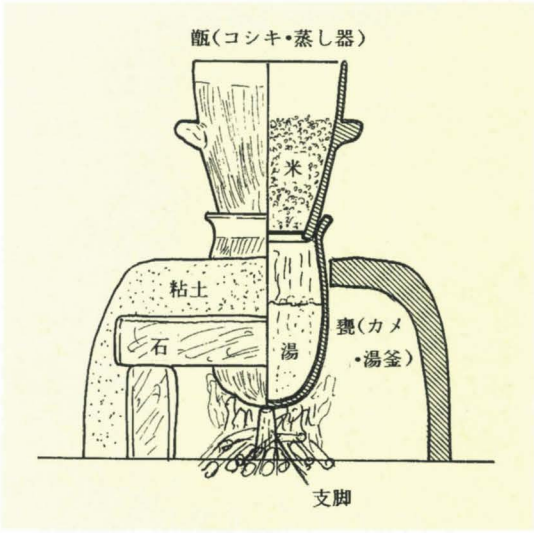
火災にあって焼け落ちた竪穴住居（27号竪穴住居）

額見町遺跡跡で発見された二つのタイプのカマド

この時代の竪穴住居跡には、土師器の甕などを効率的に熱するために保温効果のある窯状の専用煮炊き場としてカマドが作られます。カマドは、本体を粘土で作りますが、焚き口のみ切石で四角く作られています。薪がくべられる奥には甕（湯釜）を支える支脚が立ち、その上方は甕をはめ込むための穴（掛け口）が開けられています。甕の上には甑（蒸し器）が乗り、甕の中で沸かしたお湯が蒸気となって、甑の中の米を蒸します。当時のごはんは米を炊いたものではなく、蒸して食べていました。今の「おこわ」に匹敵するもので、当時はこれを「強飯」と呼びました。

額見町遺跡ではこのカマドの形態が飛鳥時代中頃を境として、大きく構造が変化します。

飛鳥時代前半のカマドは、「オンドル状遺構」と呼ばれる特殊なカマドで、日本では現在まで40遺跡程度でしか確認されていません。石川県はもとより、北陸でも確認例はなく、東日本でも東



カマドの構造と煮炊き道具の使い方

13号竪穴住居跡のオンドル状遺構

2号竪穴住居跡のオンドル状遺構

33号竪穴住居跡のオンドル状遺構

29号竪穴住居跡のオンドル状遺構

カマド構築粘土断ち割り断面（11号竪穴住居跡）

（2号竪穴住居跡右側）

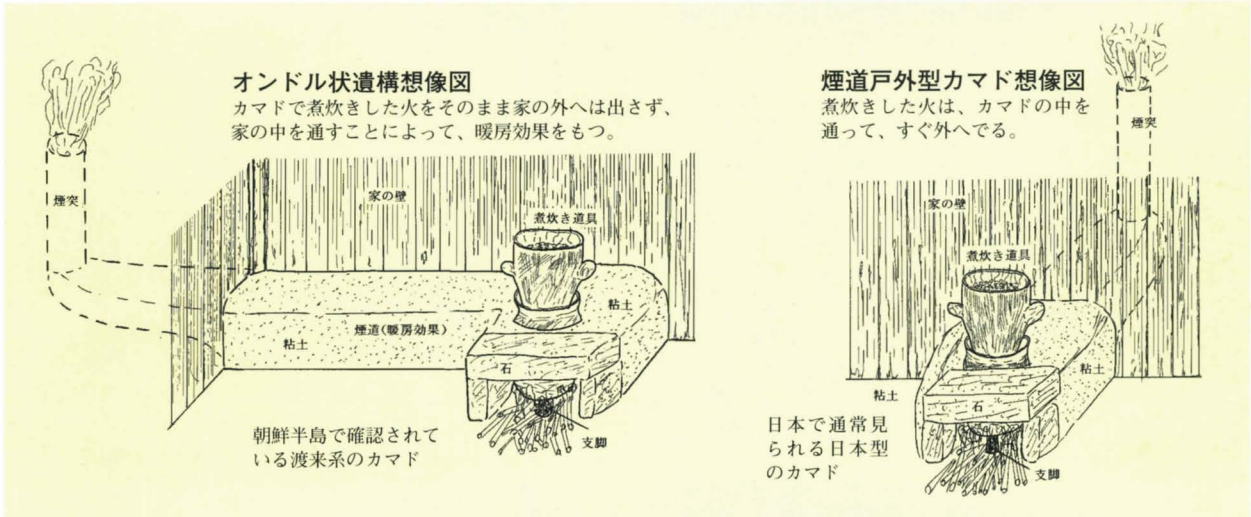
カマドを壊すときに祭られた煮炊き道具　（13号竪穴住居跡左側）

京と長野で３遺跡確認されるだけです。このオンドル状遺構の特徴は、カマドがＬ字形に曲がることで、家の壁伝いに煙道（煙突）が通る構造のものです。何故、このようなカマドをオンドル状遺構と呼ぶかですが、中国や韓国の山村などで現在でも使われているカマド直結型の床暖房施設、「温突（オンドル）」に繋がる構造であると予想されるためです。朝鮮半島北部にはこのようなＬ字形に煙道が曲がる構造のカマドが竪穴住居に作られる遺跡が確認されており、類似した構造のものが、ロシア北東部や中国北東部などのアジア大陸極東地域に分布します。つまり、寒冷な地域での暖房施設として発展したものであり、本来、日本の温暖な気候の中では成立し得なかったものと言えます。このようなカマドが出現した背景としては、そのような生活様式をもった人々が移入してきたことを想定したく、オンドル状遺構は、大陸からの渡来人が作った竪穴住居であることを示す資料と判断される訳です。それが飛鳥時代前半の竪穴住居跡全てに見られることは、この地区の飛鳥時代前半の竪穴住居に住む人々が全て渡来人で構成されていたことを物語ります。

カマド完掘状況

日本で通常見られる煙道戸外型のカマド（10号竪穴住居跡）

オンドル状遺構は飛鳥時代中頃までは確認できますが、同時に煙道が家の壁伝いに通らずに、直接カマドから家の外に出て、煙突が立つ日本で通常見られる煙道戸外型のカマドが登場します。この構造のカマドはこの地域では飛鳥時代前半から存在しているもので、日本的な普通の構造のカマドと言えます。飛鳥時代後半のカマドが全てこの通常形態のカマドに統一されることについては、暖房効果を併せ持つオンドル状遺構が温暖な日本の気候に適さなかったものと考えられます。「日本住宅は夏を旨とすべし」という言葉に有るように、日本の気候では、オンドル状遺構のようなカマドの熱を暖房に利用することよりも、カマドの熱を戸外に排出することに重点が置かれたのでしょう。



竪穴住居の床面構築の工夫

額見町遺跡の竪穴住居跡では、主柱で囲まれた部分が土間状の硬い床になっていますが、これはただ整地しただけでなく、意識的に硬い粘土を貼り付けて叩き締めて作られています。また、この主柱周縁部分にも粘土混じりの土が貼られますが、この部分はあまり硬くなっていません。

さて、このような土を貼って床面を整地することを貼り床と言いますが、貼り床の下が直ぐ地山になる部分と穴が掘られる部分が有ります。主柱で囲まれた空間は日常的によく使用する部分であるため、地面が下がらないように硬く叩き締めて仕上げており、この部分には床下に穴が掘られていません。これに対し、寝間やもの置き場に使用される主柱周縁の空間は、床下に穴が掘られる場合が多く、床は比較的柔らかく仕上げています。これは空間の機能に合わせた床面構築と言え、床下の穴は湿気を溜めるために掘られたものと考えられます。また、床面に施される貼り床も薄く１層貼るだけで、水の浸透が大きく異なり、地面の湿気が直接上がらないようにするための床面構築の上での工夫であると言えます。この床面構築の方法も、時期によって変化しており、額見町遺跡の土壌に適した方法に改良されて行ったものと言えます。まず、飛鳥時代前半ですが、浅い大きな長方形の穴が１～２カ所、主柱の外側に掘られる方法にほぼ統一されています。これが飛鳥時代後半になると、主柱間の一部の部分を除く竪穴ほぼ全体に床下の穴が掘られるようになり、浅いものや深いものが重複しながら存在します。長方形の大きな穴は確実に深く掘られる傾向をもち、除湿効果を高めています。この床面構造のものは主に四本主柱の大型竪穴に行われるもので、柱穴が壁際に寄る中小型竪穴では床下の穴が中央付近に１～３カ所程度掘られるだけです。ただ、中小型竪穴も床下の穴は深く掘られており、大型竪穴同様、除湿効果を高めています。

飛鳥時代前半の竪穴住居に掘られた除湿穴（32号竪穴住居跡）

飛鳥時代後半の竪穴住居に掘られた除湿穴（23号竪穴住居跡）

このような竪穴住居の床面構築の工夫は、額見町遺跡の存在する地面が粘土質の水を染み込まない土壌であることに原因がありますが、額見町遺跡でも水はけのよい礫まじりの土層に掘られた竪穴住居においては、このような湿気抜きの穴をもっておらず、ちゃんと構築工法を区別していたようです。

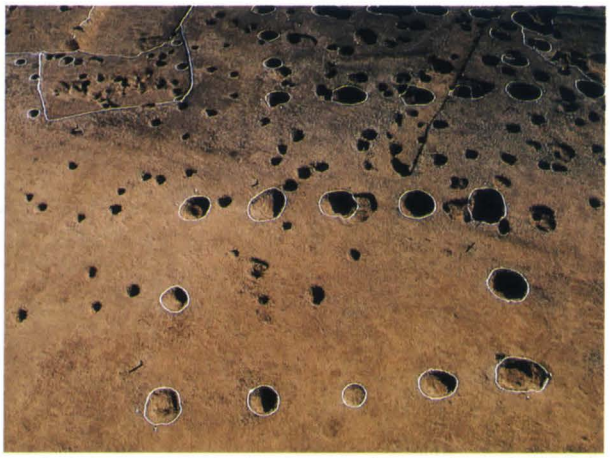
3．古代のプレハブ建物（掘立柱建物跡）

掘立柱建物跡

平地に建てられる長方形の建物跡で、遺跡では柱穴のみが長方形に並んで発見されます。外側に柱を建て並べ、梁を渡して屋根をかける建物で、板塀か土塀で外側を囲います。建物の外側に柱穴を並べる側柱建物が一般的ですが、中にも柱が並ぶ総柱建物もあり、これは高床式の倉庫になると予想されます。

側柱建物は、一般的には住居ですが、規模によっては、倉庫的な機能をもっていたり、官舎的な機能をもっていたりします。額見町遺跡で発見された側柱建物は、竪穴住居規模に近いものが多く、大半は居住用であったと予想します。側柱建物の平面形は、竪穴住居の正方形に近い形よりもかなり長方形で、竪穴住居の間取りとは大きく異なっていたようです。竪穴住居が主柱を軸に間取りを決めていたのに対し、掘立柱建物は入り口を起点として横へ分割されていたものと予想されます。

また、大きな構造上の違いとしては、竪穴住居の場合、家に造り付けられていたカマドが、掘立柱建物では屋内で固定化されて作られないことです。具体的にどのような構造かはわかりませんが、移動式のものであったり、屋外にカマドに類するものが作られたものと予想します。額見町遺跡ではこの屋外での煮炊き場の痕跡をもつ屋外炉が17カ所確認されています。炉にカマドのような粘土構築は見られず、粘土を貼った焼けた床のみ検出されますが、その周辺から煮炊き用の土師器を出土するケースが多いようです。床面は使っていた面での確認ができないため、全くの予想ですが、床を上げていたとは考えられず、土間のままが一般的だったと思われます。ただ、建物の中を分割する意味で、片側を板敷きにしたりすることも十分に予測されます。



飛鳥時代の側柱建物（手前が３号掘立、奥が２号掘立）

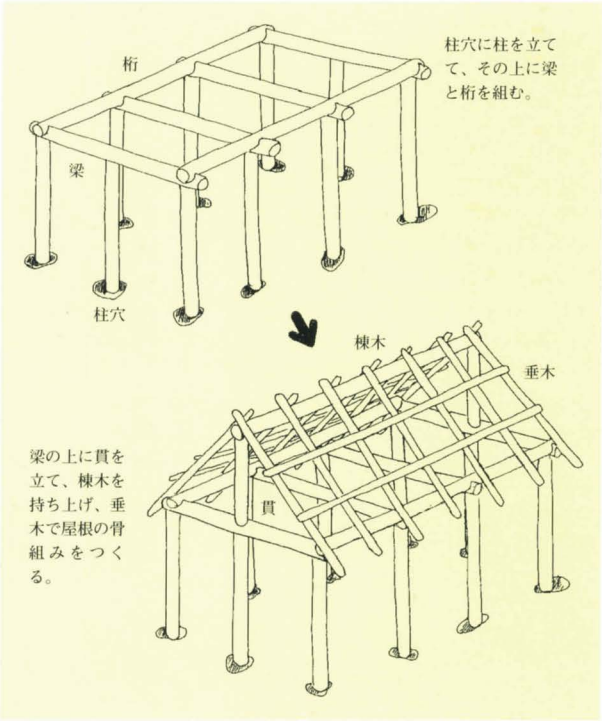
掘立柱建物跡の柱穴

遺跡の残される掘立柱建物の痕跡は柱穴のみであり、竪穴住居跡に比べてその情報は大変少ないと言えます。しかし、柱穴の配置・間隔、柱穴の形態や寸法には、いろいろな法則性が有り、それを整理することで、建物の性格やランク、そしておおよその時期も想定できます。例えば、柱の並ぶ間隔について見ると、飛鳥時代の狭くて多くの柱が立ち並ぶものから奈良時代以降の少ない本数ないしは間延びした間隔で柱が立つものへと変化する傾向があります。

また、大きな方形の柱穴が掘られるものがランクの高い建物に採用される傾向が強いことや、側柱建物でも柱穴が大きくしっかりとして掘られる小型の建物は倉的な機能を有していたというように、掘立柱建物を建てる時には、共通する約束事が有り、統一された建築様式のもとで建てられていたことがわかります。このようなことはこれまでの地道な研究によってわかってきたことであり、大きな研究成果と言えます。

A地区の掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は飛鳥時代始めから存在していますが、この建物が主体を占めるのは、竪穴住居跡の数が減って行く、奈良時代前半頃からと予想しています。しかし、A地区の掘立柱建物跡を見ると、飛鳥時代に入りそうな掘立柱建物跡が多く、奈良時代特にその後半に位置付けられるような形態のものは少ないようです。A地区の掘立柱建物も、竪穴住居の減少する奈良時代にはそのピークが過ぎ、減少するものと予想できます。



掘立柱建物跡の復元想像図

4．ゴミ穴は語る

土器を埋めた穴にはいろいろなものが有ります。意識的に母なる大地である土に返す意味で土中に埋納したり、地鎮祭祀のために土器を埋めたり、墓穴の中に入れる副葬品として埋める場合もあります。しかし、土器を出土する穴の多くは、不要物として埋めるもので、つまりはゴミ穴と同じ性格をもつものです。

現代、ゴミは一括して焼却したり、埋められたりしていますが、一昔前は、各家庭で燃やしたり、屋敷地の中で穴を掘って埋めるのが通常でした。ゴミはいつの時代も存在し、それを捨てた穴や窪 地があるわけですが、このゴミはその時はただの不要物でも、現在においては、昔の生活様式や生活用具を知らせる大変貴重な情報源です。古代もゴミ穴は存在し、土器を廃棄した穴として発見されます。このような穴には、当然、土器以外のものも捨てたと思われますが、有機物は腐って残らず、偶然保存状態のよい場合のみ、骨や貝殻が出てきます。額見町遺跡では柱穴の柱を抜き取った跡に貝殻をまとめて捨てたものが２カ所見つかっており、土器廃棄穴からも僅かに出土しています。例外的なものを除くと、ゴミ穴から出土するものはほとんどが土器です。額見町遺跡のゴミ穴からは煮炊きする土器、貯蔵用の土器、飲食に使った土器などが入り交じって出土しており、まとめて一カ所に捨てられた土器を整理することによって、その当時の生活に使われていた用具セットを復元することができます。遺跡の限られた少ない情報の中では、ゴミ穴の出土品は貴重な情報源なのです。

このような土器を捨てるゴミ穴は、専用にゴミ穴を掘る場合と、何かに使われていた穴をゴミ穴に利用する場合とがあります。その最も代表的なものは、竪穴住居が使われなくなった跡地の竪穴の窪地です。竪穴住居跡から出土する土器の多くは、竪穴住居を使っていた人が捨てて行ったものではなく、後に窪地を埋め戻す時に捨てたものです。竪穴住居跡の土器の出土は、埋まっている土の下層よりも上層で多く、窪地がぬかるまないために、意識的に土器を混ぜたことも考えられます。ただし、竪穴住居のカマド周辺から出土する煮炊き用土器やカマドの脇や壁際に置かれた状態で出土する食器などは、後でゴミとして捨てられたものではなく、この住居を壊す時に意識的にそこで使っていた土器を廃棄して行ったものと思われます。カマドの火を新しい住居に移すときに行われた儀式に伴う可能性もあります。

ゴミ穴として使われた大型の穴（38号土坑）

シジミ貝を捨てた柱穴

竪穴住居跡の跡地を利用した土器捨て穴（17号竪穴住居跡）

竪穴住居のカマド周辺に捨てられた土器（12号竪穴住居跡）

5．額見町遺跡の鉄器作りと技術者

額見町遺跡では鉄滓と言って、砂鉄から鉄を作ったり、鉄の塊から鉄製品を作ったりする時に不要物として出る鉄のカスが大量に出土しています。この鉄滓の存在は、ここで製鉄が行われていることを物語るもので、鉄滓の種類から、ここでは鉄の塊から鉄製品を作る、製鉄鍛冶が行われていたことがわかります。製鉄鍛冶とは、溶鉱炉で砂鉄から作られた鉄製品の原料となる鉄の塊を木炭の強い火力を使って熔かしたり柔らかくして、目的の形に叩き延ばし、成形する行為です。鉄の塊を熔かす時には、炉が必要で、A地区では炉跡は発見されませんでしたが、焼け石に鉄滓の付着したものが何点か出土しており、石囲み炉が主流であったと予想されます。鍛冶炉は木炭を燃料に使用して短時間で高温にする必要があり、フイゴと言われる送風施設を使って強制送風されます。送風施設から炉へは送風管（フイゴの羽口）でつながれており、送風管の破片も遺跡から何点か出土しています。

製鉄鍛冶炉にたまった鉄カス

遺跡では、主に飛鳥時代後半以降の竪穴住居跡から鉄滓や石囲み炉の石や送風管、そして刃をつけるための砥石が多く出土しており、当時、

鍛冶炉へ風を送る送風管

鉄製品に刃をつけるための砥石

多くの鍛冶炉が作られていたことが予想されますが、このような製鉄鍛冶は、極めて特殊な技術であり、専門の技術者が存在していたことを物語ります。製鉄鍛冶が村の鍛冶屋さん的な一般的なものとなるのは、それが普及する中・近世のことであり、額見町遺跡が栄えていた飛鳥時代では、極めて特殊な技術でした。それが集中的に行われることは、村で使われる鉄製品を作っているものではなく、他の村や地域に供給するために作られていたものと言え、一つの村の重要な産業として機能していたことを示します。

製鉄鍛冶を行っている様子（鬼頭1985より転載）

額見町遺跡の製鉄鍛冶に対し、原料砂鉄を熔かして鉄の塊を抽出する製鉄を砂鉄製錬と言いますが、砂鉄製錬の製鉄遺跡が額見町遺跡から東へ５～６㎞の山間部に集中して遺跡群として存在します。製鉄遺跡群は、北陸でも最大級規模で、加賀地域唯一の古代製鉄遺跡群です。最近の研究で、製鉄遺跡群の始まりが飛鳥時代前半までさかのぼることがわかってきており、額見町遺跡の成立時期と重なります。また、製鉄遺跡群と地域を重ねて、製陶遺跡群も存在し、山間部に製陶・製鉄の一大コンビナートを形成しています。額見町遺跡の製鉄鍛冶は、ここで作られた鉄の塊を原料とする、鉄作りの第２工程である鍛冶を行う村として、製鉄遺跡群と強い関連性をもって存在していたものと予想します。また、製陶についても、村では通常出土しない窯で使われる専用焼き台が数点出土しており、強い関連性を指摘できます。古代工業地帯のある山間部には生活村落を営むような場所に乏しく、母体となる村落が必要となりますが、額見町遺跡をそのような性格をもつ村として考えることは可能と言えます。

須恵器窯で使われる専用焼台

このように見ると、額見町遺跡には多くの技術者が住んでいたことになりますが、遺跡に残された生活痕跡から、それらは渡来人である可能性が高く、村の形成時にこれだけまとまった数の渡来人が移住してきたことも理解できます。産業の基幹となる製陶・製鉄を地元に成立・定着させるため、地方役人は積極的に渡来人を招き入れたものと思われます。

6．古代土器の用途と時代ごとの移り変わり

古代で使われる土器には、灰色ないしは青黒い色をした硬く焼けしまった須恵器（すえき）という陶器質の焼き物と肌色ないしは赤く軟質に焼けた土師器（はじき）という素焼き系の焼き物があります。

須恵器は10m程度の大型のトンネル式登り窯を使って1,200度前後の高温で焼く、現代の陶芸家さんなどが行っている陶器の焼き方で、今から約1,600年前に朝鮮半島から日本に伝わった焼き物技術です。これに対し、土師器は縄文時代から続く、日本古来の土器焼き方法のもので、野焼きと呼ばれている薪を燃やした焚き火の中に土器を置くものです。ただ、古代の土器焼きは、下に穴を掘る点と上を藁で覆って焼く点が異なり、少ない燃料で高い温度を長時間保つ覆い焼きと呼ばれる土器焼き方法です。

土器の形、種類はいろいろありますが、古代で使われる土器は、その用途によって、食膳具、煮炊き具、貯蔵具に分けられており、それにあわせて須恵器と土師器を使い分けています。

食膳具は、食卓で個人が使うお茶碗のような椀や皿の形をした坏と呼ばれる小型食器と卓に乗せて共同で使う盤や鉢と呼ばれる大型食器とがあります。飛鳥時代後半以降は、日常使われる食膳具はほとんど須恵器で作られますが、飛鳥時代前半までは、それほど須恵器の普及は高くなく、内側を黒く仕上げた内黒土師器が半数近くを占めます。坏は、前半も後半も蓋の付いたものが主流ですが、その形は、飛鳥時代前半では蓋も身も底の丸い不安定な形で、土師器でも類似した形をしています。飛鳥時代後半になると、底の平たいないしは台のついた安定性のある形に変化し、蓋にはつまみがつけられるようになります。意識的に食卓食器として使い勝手のよい形に変化したものと言えます。飛鳥時代後半以降、須恵器が大半を占めますが、お祭り用ないしはお祝い事用の食膳具が土師器で作られます。この土師器は内外面を赤く塗った洗練された作りのもので、内面に暗文と呼ばれるラセン模様を施しています。このような暗文土師器は、奈良の都で使われるものを真似て作ったもので、都の儀式を真似るために必要な土器であったと予想されます。

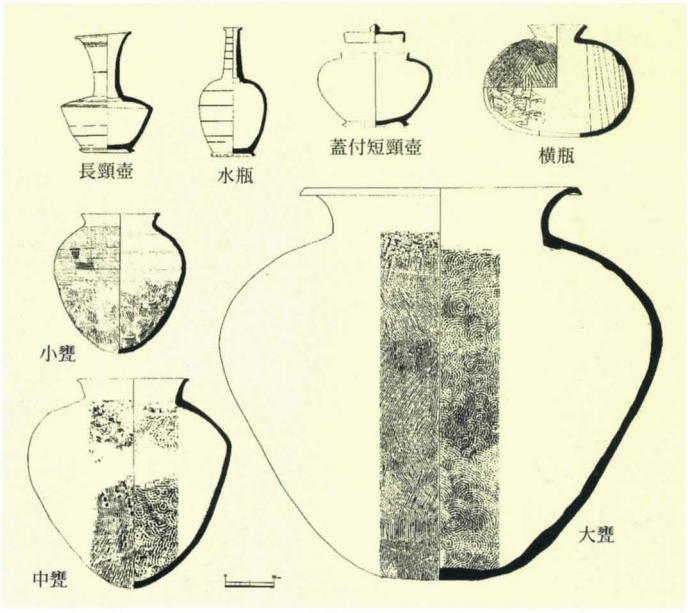
飛鳥時代前半の食膳具

飛鳥時代中頃の食膳具

飛鳥時代後半の食膳具

奈良時代の食膳具

貯蔵具は、割れにくい硬い材質で、液体を入れるのに適した須恵器が採用されますが、例外的に赤く塗った土師器も使われています。形は甕と呼ばれる極めて大型の貯蔵具と壷・瓶と呼ばれる中小型の貯蔵具に分けられます。甕は丸底の不安定な形のため、地面を掘って固定して使われるような、移動の少ない貯蔵具であったと予想します。水甕のほか、穀物を入れる甕、味噌や酒を醸造するための甕などが予想されます。中小型の壷・瓶は、広口で首の短い短頸壷と呼ばれる形と首が長く口細の長頸瓶と呼ばれる形とに分けられますが、どちらも底が平たいか台の付く安定性に優れた形をしています。甕のように固定して使われてたものではなく、頻繁に移動して使われる貯蔵容器であると考えられます。大きな容器から小分けして入れる容器や食卓の上で使われる容器、特に小型瓶などは酒や水を入れて食卓で使われる状況が想定されます。



貯蔵具の主な形（奈良時代前半頃のもの）

煮炊き具は、火に掛ける道具であるため、耐火性に優れた土師器で作られます。カマドで使用されるものが大半で、胴の長い甕はカマドに直接掛ける湯沸かし釜として、底に穴の空いているバケツ形の甑は、その上に乗って米を蒸す道具として使われます。カマドに直接掛けなくても、炉のような施設で煮炊きをする道具として、小型甕と鍋があります。小型甕は内側の焦げの状態からシチュウや汁ものなどのオカズ類を煮た容器と位置付けられており、鍋も同様の性格をもつものと予想されます。これらの土器は飛鳥時代前半に形が出揃い、それ以降もこの4つの形を基本として作られ続けますが、飛鳥時代後半以降、須恵器と同じロクロや成形道具を使った製作技法が採用されるようになります。

飛鳥時代前半の煮炊き具セット

飛鳥時代後半の煮炊き具セット

海水を煮つめて塩を作った道具

移動式のカマド（叩き成形している）

7．特殊な出土品とその背景

陶硯と文字を書く人の存在

古代の律令政府は、文書での伝達形態を重視していました。文書は紙も使われていましたが、木の札に書かれることが多く、古代の役所跡などからは、木の札に書いた文書、つまり木簡が多く出土します。木簡は、筆と墨で書くもので、訂正したり書き直したりする時には、表面を削って消していました。つまり、古代の役所では木の札と削るための小刀、筆、墨、硯は必需品であった訳です。筆や墨、木簡などの大半は腐ったり、溶けたりして消滅するため、遺跡からは硯のみ出土することが多いようです。当時の硯は、須恵器の窯で焼いた陶硯が主流で、飛鳥時代、奈良時代の主流の形は、丸い形をした円面硯です。額見町遺跡Ａ地区では、この円面硯が３点ほど出土しており、地方役人の存在が予想されます。

飛鳥・奈良時代の陶製の円面硯

土馬・鳥型須恵器や土製模造品の出土と古代律令祭祀

額見町遺跡からは、飛鳥時代終わり頃から奈良時代頃に位置付けられる律令社会の行事や祭りの時に使われる特殊な形をした土製品が出土しています。使用される場面や目的はまだよくわかっていませんが、土馬などは厄を祓うお祓いの儀式での神に対するお供え物の代用品として、鳥形須恵器は鉄生産に深いかかわりをもつ氏族の持ち物として、陶製分銅・陶製紡錘車は実用品である金銅製・石製の儀式用土製模造品として、各々使われていたものと予想しています。そして、このような道具類は、主に都で行われる律令社会の儀式を模倣して作られ、そして使用されているもので、そのような儀式を行うことが、律令社会の象徴であったと予想します。

陶製紡錘車

陶製分銅

土馬と鳥形須恵器

織物生産と紡錘車

原始時代より布は生活必需品でありました。それを織るために糸が必要であった訳ですが、麻でも絹でも糸を紡ぐ時には、紡錘車が必要でした。紡錘車とは糸巻きを行う際の弾み車兼重りで、糸を巻くための棒に差し込まれて使われます。額見町遺跡では石製と鉄製とが出土しており、鉄製紡錘車は７世紀前半の竪穴住居から出土しています。県内では最も古い出土例の一つと言えます

石製紡錘車

魚釣りと土錘

潟に面した遺跡の立地を考えれば、生業の一つに漁業があった可能性は高く、額見町遺跡から土錘が出土することは自然と言えるでしょう。土錘は、土師器質に焼けたものと窯で焼かれた陶製のものとがありますが、管状の形や管に紐を通して使う点では同じであり、魚採り網の重りとしたものです。

土錘

以上、これらの特殊な出土品は、額見町遺跡の中にそれらを所有する人間がいたことを示しており、そしてそのことは如実に遺跡がどのような性格を帯びているのかを浮かび上がらせてくれています。

Ⅴ．調査成果から予想される額見町遺跡の性格

今回の発掘調査から得られた成果をまとめると、主に４点が上げられます。

第１点は、オンドル状遺構をもった竪穴住居跡の発見です。この住居跡の発見は、渡来人の移住を裏付けるものであり、それが一つの村の形成期にまとまって確認できたことは大変重要です。オンドル状遺構は、北陸では初例ですが、この発見をきっかけに資料は増加するものと予想しており、７世紀の律令的地域開発を考えるにおいて、キーとなりえる資料であると評価します。また、今回の額見町遺跡の資料は残りがよく、その構造や機能解明においても多くの資料を提供してくれています。本当に暖房機能をもちえていたものなのか、朝鮮半島の「カン」や「オンドル」の起源を考えるにおいて重要な資料と考えます。

第２点は、飛鳥時代の製鉄鍛冶資料がまとまって確認されたことです。製鉄鍛冶の第１次普及は古墳時代ですが、地域の中で砂鉄製錬が始まってゆく飛鳥時代は、鉄生産の大きな転換期にあたっていたはずです。しかも、額見町遺跡では砂鉄製錬遺跡と強い関連性をもちながら、製鉄鍛冶を行っている点で重要であり、飛鳥時代の鉄生産がどのような形で編成され、地域の中で成立していったかを考える貴重な資料となります。

第３点は、飛鳥時代後半に盛行する村落遺跡が調査されたことです。飛鳥時代後半という時代は、新しい律令社会が地域の中で整備・形成されて行く時代であり、その時期に盛行してゆく遺跡は、政治色を帯びたものが多い傾向にあります。加賀地域ではこのような性格を有する集落遺跡が、調査された事例は少なく、しかも、台地全体を調査するような大規模なものは今回が初めてと言っても過言ではありません。額見町の地名が、越前国江沼郡額田郷に由来することも興味深く、遺跡内に存在する式内社との関連なども注目されます。

第４点は、陶硯や律令祭祀具、鳥形須恵器などの特殊な出土品が上げられます。これら出土品のもつ性格については、先に述べたとおりですが、陶硯や律令祭祀具は第３点に、鳥形須恵器は第１点と第２点に関連する性格をもった出土品であると位置付けられます。

以上、４点を総合し、額見町遺跡の性格を考えれば、江沼郡額田郷内に位置する古代律令的な政治色をもつ遺跡であると位置付けられます。しかも、陶硯や祭祀具の出土は、近くに役所的な施設が存在した可能性を示唆しており、今後の調査でそのような建物が発見される確率は高いと判断されます。また、この遺跡には成立当初から渡来人が技術者として関わっており、江沼郡の製陶・製鉄の手工業生産の振興に強く関与していたものと予想されます。特に製鉄に関しては、山間部での砂鉄製錬の開始と時を同じくして始まっており、加賀地域最大の製鉄遺跡群の母体となる村落である可能性ももちます。製鉄に関連することは、額田郷の郷名由来でも見られます。額田郷はそもそも額田部が設置されたことに基づいていると考えられていますが、額田部の祖をたどってゆくと、「天津御影命」という鍛冶の神にたどりつきます。つまり、額田部は鍛冶族であるという見方もあるわけで、この地が額田郷とされた所以がここにある可能性も高い訳です。また、他ではあまり出土例を知らない鳥形須恵器が数点出土していることも製鉄との関連を補強しています。この鳥形須恵器は北陸の製鉄遺跡と場所を同じくしながら製陶を行っている遺跡、例えば富山県の射水丘陵窯跡群や新潟県の新津丘陵窯跡群、石川県七尾市池崎窯跡で出土例があり、強い関連性を指摘できます。この鳥の形を模した容器は、その起源が朝鮮にあり、日本で出土する鳥形須恵器は、渡来人の手によるものとの仮説も立てられています。現に、鳥形須恵器を焼いている射水丘陵窯跡群の須恵器窯では、一緒に出土している須恵器に渡来人とおぼしき人名が刻まれており、須恵器生産に渡来系技術者が関与していた可能性は極めて高いと言えます。渡来人と鉄生産、そして額田郷の郷名は、強い因果関係をもち、それが額見町遺跡の性格を決定付けているものと予想されます。

これまで、Ａ地区の調査成果より導き出される、額見町遺跡の性格を述べてきましたが、まだ調査が計画全体の15％程度であり、あくまでも仮説の域を越えるものではありません。今後の調査成果如何では、今回述べたことを大きく変更する必要性も十分にありますが、現段階での予測と今後の調査展望という意味で、述べさせていただきました。今後の調査は、平成９年度に北西側のＢ地区、平成10年度に南西側のＣ地区とＤ地区というように、徐々に南へ移って行く予定であり、遺跡の中心部と予想される区域に調査が及んで行きます。そこではいったいどんなものが地中に眠っているのでしょうか。今後の調査が本当に楽しみな遺跡であります。

1．本書は、小松市が施工する小松市串・額見土地区画整理事業に先立って、小松市教育委員会が実施した造成用地内埋蔵文化財（額見町遺跡）発掘調査の概要報告書Ⅰです。
　報告の内容は、調査内容の普及・啓蒙に主眼をおいたもので、簡易な文章で一般の方々に解り易くしてあります。

2．発掘調査の費用及び本書の印刷経費は、土地所有者である小松市土地開発公社が全額負担しました。

3．発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、担当者は次のとおりです。
　《調 査 地》　石川県小松市額見町なの部
　《調査面積》　5,500㎡（Ａ地区）
　《調査期間》　平成７年９月20日～平成８年10月31日
　《担 当 者》　小松市教育委員会埋蔵文化財調査室主査 望月精司

4．本書の執筆及び編集は、大橋由美子の協力を受けて、望月が担当しました。

5．本書を作成するにあたり、以下の文献を引用及び参考とさせていただきました。

鬼頭清明　1985 『古代の村』（古代日本を発掘する－６－）　岩波書店
浅川滋男・坂田昌平　1997 「オンドルと丸屋根の家」『季刊民族学』81号 国立民族学博物館友の会
望月精司他 1995　『念仏林南遺跡Ⅱ』小松市教育委員会
森浩一・門脇禎二編　1997 『渡来人－尾張・美濃と渡来文化－』　大巧社